紹　介

日本美術史研究

故濱田耕作著

本書は青陵濱田博士の著作選集の第二册をなすものであつて、第一册『考古學研究』と同じく、京大考古學教室梅原教授のもとに、門下生一同が編輯の責に任じ、故青陵先生の恩顧に報ずるの微意をつくしたものである。筆者は、ことに校正及び圖版編輯にあたつたのであつて、その間に存する責任を負ふものであるからして、この書についての批評をなすことは、二重の意味でこれを避くべきものと思つてゐる。したがつて、この書にあらはれた青陵博士の日本美術に對する深い御造詣のあとを、まづ本書をみざる人々のために、かきしるしてみるにすぎない。

本書は明治三十八年八・九月に『國華』に發表せられた「天平時代の彫刻」より、昭和十年七月に『寶雲』に發表せられた「原田本マリヤ十五玄義圖」に至る三十數年間に、濱田博士が諸雜誌に掲載せられた論文三十五篇を收載したもので、かつて博士御自身で單行本にまとめられたものからは採錄してゐない。法隆寺關係の論文數篇はこの三十五篇の論文中から故意にこれを除いてあることは、日本美術史研究書として、やゝ不自然の觀はあつたが、次に刊行せらるべき『東洋美術史研究』の體裁上、この内に收載せられることに方針がさだめられたからである。しかし、『日本美術史研究』は、卷首に「我國上古の美術に就いて」をよみ、卷末の「菱川師宣の事ども」をよむに至るまで、日本美術史の各時代についての、博士の論述に接することができ、しかも青年時代の博士の麗文も晩年の博士の卓見をも、つぎつぎに、ふれることができることを幸とするのである。

濱田博士には、國華社で活躍せられた時期があつたので、本書には『國華』に發表せられた論文が比較的多い。それらは多くは、明治三十八年以降明治四十二、三年までで、本書に於ける「佛教以前の日本美術」「推古時代の彫刻」「天平時代の彫刻」「藤原末期の繪卷物に就いて」「平家と美術」「鎌倉時代の美術」「雪舟の幼時と豪溪の奇勝」「狩野元信論」「桃山時代と其の美術の特質」「久隅守景」「宮本二天」「菱川師宣の事ども」等々、そのほとんど日本美術史全體にわたつて執筆せられてゐる。これらは、たしかに概説風な記述を意圖されたものに相違なく、各時代に關する輪郭を明瞭ならしめることに、目的をおかれてゐる。したがつて、これらの諸篇は日本美術史の入門篇として、もつとも便利なものといふことができるのである。

これらに對して、圓熟した青陵博士の鑑賞眼の高さと學風の豐饒さを想はせる論文としては、「天平彫刻と新羅彫刻」、「狛犬像の一傑作」、「日本の摩崖石佛像」、「道明寺の十一面觀音」、「原田本マリヤ十五玄義圖」をあげることができる。私自身の感想をのべ

させて頂くならば、「天平彫刻と新羅彫刻」とに於ては、三月堂の彫刻及び建築がそれぞれ比類なき天平彫刻の傑作なるにかゝはらず、現在三月堂内陣に於ける彫刻配列のもやうが建築と不調和なるを指摘せられ、これが慶州石窟庵の彫刻及び浮彫と石窟ドームとの調和してゐることに比較し、三月堂中の彫刻が元來いまのごとき位置にあつたのかどうかを疑つてゐられる。彫刻を彫刻のみだけで鑑賞しないで、彫刻のあるべき環境、または建築藝術との調和に於てみることを説かれた博士のひろい美術觀に則つてゐるものが示されてゐる。考古學者としての博士には、土器には土器相應の簡單な美しさをみるといふ立前があつた。單純な土器を鑑賞(觀察と鑑賞とは博士では表裏一體であつた)した上で、複雜な繪畫・彫刻に對する目を養ふがよい、とは筆者がいくどか教へられたところであつた。本書卷頭の「我國上古の美術について」のごとき、考古學的材料によつて美術を語ることは青陵博士をほかにしては説明者を求めがたいものであり、その含蓄するところをとらへがたい。

「道明寺十一面觀音」は、博士がその執筆の動機をほしがきにかいてゐられるごとく、博士の情愛溢れる面影をつたへた、まことに尊い論文である。河内の國は博士が祖先の血をひいた土地であり、そこで博士の考古學が結實したのであるから、そこの道明寺の本尊をかたる博士の姿は、そのことだけでも、單に史家の冷徹に終るはづがない。筆者はこゝに、道明寺十一面觀音のやさしさをとかれたこの論文の結びの部分を引用してみようと思ふ。

「言ふ迄もなく各時代の樣式には各其の特長があり、例へば藤原時代のものは、古さに於いて天平のものに及ばないにせよ、藝術の價値は必しも下るといふことは無い。たゞ其の美の表現の形式が異なる丈けである。……まことに聖林寺の十一面は、天平の雄々しく秀でたる氣格を示してゐるであらうが、それは「スタイルの大さである。此の道明寺の像に比ぶ可き深く細かな「デリケート」な味はそこに求めることは出來ない。貞觀の鋭い手法に「コケチッシュ」な容姿を具へた法華寺の十一面は、世に比ひ罕なるものではあるが、其の險しい面貌は遂に人々をして、慈悲の大願に洩れしむるのである。そこには此の道明寺像の如き優しさを見ることが出來ないではないか。聖林寺の像は觀音をなほ男性として表現してゐる。法華寺のは女性の體格に近くしてなほ其の心ばえは男性である。而かも此の道明寺の像に至つては其の肉身も、其の精神と共に女性の觀音であつて、「フェミニズム」の傾向に支配せられた藤原時代の所產として、斯の如き像の現出した事は洵に故あることに違ひない。而して私共日本人は爾來此の女性として表現せられた觀音の藝術に親んで來たのであつて、私は此の點に於いて眞に大慈大悲の尊像を、此の種の觀音に於いて發見するのである。」

まことに、濱田博士の學風は、論理・論證に忠實であるよりはさきに、まづ直觀に忠實であられた。そしてその直觀は日本美術の優美と和かさとによつて浸され潤され、あくどさ、晦澁さを排棄せられた。博士は私たちの知るかぎりでは考古學の樹立に縣命

であられたので、その内心の美術觀をしいては人に強請されなかつた。しかし、今日、本書のごとき纒れる美術史論文集として、その永年の鑑賞生活がうかゞひうる機會をあたへられるとき、私には、博士の理想境には日本古典美術が中心となつてゐたと考へられる。そして、そのことは後身の吾々にも消しがたい教訓となつてゐなければならないものである。

〔長廣敏雄〕

東洋讀史地圖

箭内　亙編
和田　清補

故箭内亙博士の「東洋讀史地圖」は大正元年に刊行せられ、以來編者の補訂を重ねて大正十四年第四版を出すに至つた。その後不幸にして博士は逝去せられたので自然改訂の機會なく、そのまゝに世に行はれたのであるが、この度該圖編纂に關する故博士の抱負なり苦心なりを知悉してゐる和田清博士が該圖に增訂を加へ、面目を一新して發刊したのが本圖である。

元來これは、從來の歷史地圖が專ら支那本部の沿革に限られたものであるのに不滿を懷いた故博士が、支那民族の建てた國家の沿革はもとより、その周圍の民族の盛衰興亡にも意を用ゐ、これを眞の意味での東洋歷史地圖たらしめようといふ意圖の下に編まれたものであつて、當時劃期的な名著であつたことは言を俟たない。しかし故博士は、多少の疑あるものは凡て省いて記入せず、又標準年代を非常に嚴密にしたゝめに、大型な圖面の大半が空白で見るものに空疏な感じとゝもにもつたいないといふ感じさへ與へたのである。此度和田博士の增訂によつて、菊倍判は四六倍判の手頃な型に改められたのと、利用者の便利を考へて標準年代に幅をもたせたのとで、よほど空疏な感じが緩和せられた上に、事實圖面も博士の手により、少きものも十數箇所の增訂を經、中には著しく面目を改めたものや、全然書き改めたり、新たに挿入したものもある。かくて舊版の誤謬が正され、不足が補はれ、現在の最高水準をゆく東洋歷史地圖として再生したことは、ひとり故博士のためばかりでなく、學界のために喜びに堪へない。

その内容をみると、卷首に支那古地圖として禹跡圖、華夷圖及び清内府一統輿地祕圖、ダンヴァル支那新圖の各一葉を掲げ、以下

一禹貢九州圖、二春秋時代要地圖、三戰國時代亞細亞形勢圖（附圖、佛教興起以前印度圖、佛教興起以後印度圖、摩揭陀地方圖）四戰國七雄圖（附圖、周及韓）、五秦一統圖、漢初封建圖）、六前漢十三部一百七郡國圖、七前漢武帝時代亞細亞形勢圖（附圖敦煌附近長城遺蹟圖、朝鮮及三韓圖）、八後漢時代亞細亞形勢圖（附圖　漢室復興時群雄割據圖）、十晉初亞細亞形勢圖（附圖、五胡興亡圖、共一石勒稱帝、第二肥水會戰、第三肥水戰後）、十一東晉時代之滿洲及朝鮮、十二南北朝時代亞細亞形勝圖（附圖南北朝末期四國分立圖、法顯三藏印度旅行圖）、十三隋代亞細亞形勢圖（附圖、隋末唐初群雄割據圖）、十四唐初亞細亞形勢圖（附圖　唐長安城坊圖、唐代海上交通圖）、十五唐代之滿洲及朝鮮、